

M-GTA 研究会 News letter no. 45

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ：<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/MGTA/index.html>

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、竹下浩、
塚原節子、林葉子、福島哲夫、水戸美津子、山崎浩司（五十音順）

＜目次＞

◇近況報告：私の研究

◇第 52 回定例研究会のご案内

◇編集後記

◇近況報告：私の研究

東京大学大学院 医学系研究科 非常勤講師

県立長崎シーボルト大学 日本グローバル・ヘルス研究センター 理事 佐瀬恵理子

研究内容：2003 年からの会員で、木下先生、皆様にご指導頂いております。東京大学の博士論文以来、政策・医療・スティグマが交差する、日本のハンセン病隔離政策を研究しています。研究参加者は、①国内療養所のマイノリティ、在日韓国・朝鮮人、②植民地時代（1910-45 年）日本管理下の韓国療養所に、当時から入所する韓国人、③韓国ハンセン病定着村の韓国人です。発病から現在（約 60～70 年間）の「病いの経験」（疾病を通じた自己・家族・社会観）を聴き取らせて頂いています。8 年間続け、お陰さまで、日本政府の②への補償（2006 年）を捉えた、唯一の縦断研究と位置付けられました。

進捗：3 回の報告で大変建設的なご教示を頂戴しました。2005-06 年のハーバード公衆衛生大学院（ポスドク）では、抽象度を上げ、「日本の感染症対策と人権」の研究・論文発表に打ち込みました。直後、米国の医学大学院で職を得て、1 年の予定が滞在 4 年を経過しました。この間、韓国で②補償後の追跡調査を行いました。

研究上の悩み：管理職として、日夜、授業・指導・助成論文等の締切に追われ、当研究は遅々たる歩みでした。分析・執筆の難点は、微妙な感情表現（韓国・日本語）を適切な英

語で説明する点、両国の文化・社会背景に疎い欧米の読み手に「病いの経験」を要領よく解説する点です。

研究の醍醐味：研究者・研究参加者を越えた人間関係が構築できました。帰国時、合間を縫って高齢の研究参加者を訪ね、発病、隔離、治癒、隔離政策廃止と、世界でも貴重な過程を生き抜いた方々から人生哲学を教えて頂いています。

ハーバードの指導者 Gruskin 先生（国際保健・人権法の第一人者）に、ハンセン病研究から卒業すべきか相談した時、「一つの疾病を熟知すると、別の現象もよく理解できる。無理して離れなくてもよい」と言われました。ハンセン病の「病いの経験」を傾聴し続け、感染症患者の人権尊重の意義が分かり、慢性感染症（エイズ、結核等）、急性感染症（SARS、新型インフルエンザ）、グローバル・ヘルス領域で、比較的新しい「人権保護研究」へとつながりました。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

.....

富山大学大学院 医学薬学研究部 老年看護学講座 新鞍 真理子

私は現在、介護保険が要介護高齢者にとって有用な制度であることを願い、要介護高齢者、家族介護者および介護支援専門員の実態を調べています。要介護高齢者を対象とした研究では、介護保険利用後の経過から心身機能の悪化防止に役立つことを検討しています。家族介護者を対象とした研究では、高齢者虐待に関連する介護負担感や介護肯定感の側面から検討しています。また、介護支援専門員を対象とした研究では、支援をする上での困難感や仕事上の負担について検討しています。いずれも、まだ限定された集団の傾向を量的に分析し、課題がどこにあるか検討している段階です。

私としては、家族介護者の無理のない介護状況と介護支援専門員が作成したケアプランの内容が、要介護高齢者の心身機能の悪化防止や QOL の向上に役立つのではないかとこの仮説を想定しています。要介護高齢者の心身機能の悪化防止や QOL の向上には意欲が重要であり、意欲は家族介護者の態度、介護支援専門員の方針やケアプランの内容の影響を受けるのではないかと考えられます。これは量的研究を用いて確率論で説明するよりも、質的に相互の関係における意味づけによって説明した方が現象をよりの確に表現することができるのではないかと考えています。研究テーマは、漠然としているので、具体的な場面に絞るなど、まだまだ工夫が必要です。

私は、20 年前、社会福祉学の修士論文で、長期入院中の帰宅願望が強い認知症高齢者と自宅で介護することができず罪悪感が強い家族介護者（娘）に対して、週末の外泊を取り入れる支援を行った約 1 年間の経過を事例研究としてまとめました。今日というナラティブ・アプローチの対話分析の手法を用いました。

M-GTA 研究会に参加されている方の中には、量的研究から質的研究へ移行もしくは拡大された方や、私のように質的研究から量的研究へ広げた方もいらっしゃると思います。私の場合は、質的研究と量的研究のどちらも中途半端になることを危惧しています。それぞれの研究方法にはルールがあるので、研究目的に応じて適切な用い方ができるようになりたいと思っています。さらに、質的研究のなかでも、それぞれ研究方法が異なるので、M-GTA を用いる場合は、M-GTA ならではの結果を出せるように心がけたいと思っています。

.....

医療法人 恵生会 南浜病院 藤野清美

私は、新潟県にあります精神科病院に勤務し、精神看護の臨床に携わっている者です。新潟は 26 年ぶりの記録的な大雪にみまわれ、それに伴い生活への影響も大きいのですが、夜でも明るく過ごすことができます。

私は、以前、新潟大学大学院博士前期課程において、「慢性期統合失調症患者の自律的意志決定過程」をテーマとし、修正版グラウンデッド・セオリー法による質的帰納的研究を行いました。私は、臨床で働き始めたころ、人生の大半を精神科病院で過ごしてきた多くの患者様に会い、同じ人間なのに何故だろうと疑問を抱いたことが、この研究に取り組むきっかけだったと認識しています。その際には、研究会にて発表させて頂き、様々な御意見を頂くことにより、自分の研究との距離ができ、客観的に分析することができたと考えています。結果図として、「他人との相互作用を通し意欲を回復・維持し自律的意志決定に至る過程」が明らかとなりました。

そして、4 月からは、博士後期課程に進学予定であり、上記の看護モデルを検証する研究を行いたいと考えています。プロセス性が明らかになっているため、臨床では介入しやすく、検証する方法について現在検討中です。つきましては、再度アドバイスを頂くこともあろうかと思えます。その際には、ご指導の程どうぞよろしくお願い申し上げます。

.....

久留米大学病院 藤好貴子

私が始めて M-GTA に出会ったのは大学院修士課程に入学した頃でした。同じ修士課程の先輩が M-GTA で研究を行っており、その過程の中で求めるプロセスがそのままに明らかになっていくことに驚きと感動を覚えたことを記憶しております。そのような中、私はもともと大学病院小児科で勤務をしており、新人看護師の病棟での教育に携わる機会があることから、修士論文でも小児科病棟の新人看護師がどのような経験をして看護師としての力を付けていくのかに注目し、就職後 3 ヶ月の経験についてまとめました。その後も研究を継続しながら、現在は就職後 1 年間という期間での小児科病棟の新人看護師の経験をま

とめています。今回の研究において、就職後 3 ヶ月の時と同じメンバーを対象としてインタビューを行ったのですが、1 年後のインタビューとなると経験が自身の中で整理されていくのか、「きれいな言葉」で語られる印象を受けました。このことは人が経験を蓄積していく過程としてあたりまえのことかもしれませんが、分析ワークシートを作成する過程で 3 ヶ月時に見られた生々しさが薄れている印象を受けています。M-GTA の魅力のひとつは、その現象を生き生きとありのままに明らかにしていくことと感じていますので、この点が分析を進めている現在どのように評価していこうかと考えているところです。データの解釈にあたっては、その語りの意味するところをきちんと汲み取っていくことが求められますが、同時にその難しさは常に感じます。分析テーマもこれでよいのかと繰り返し考えることも続けました。しばらくはこの困難感とプロセスが明らかになっていく楽しみを感じながらの分析となりますが、また皆様に研究成果をご報告できたらと思っております。

.....

◇第 52 回 M-GTA 定例研究会のご案内

【日時】2010 年 3 月 27 日（土）13：00～18：00

【場所】立教大学（池袋キャンパス）8 号館 3 階、8303 教室

参加申込 URL <https://ssl.formman.com/form/pc/b3CxMmk5a5Nz3ngQ/>

- ・定員は 100 名です。参加登録後ご都合により参加を取り消される場合には、事務局までご連絡ください。
- ・定員管理上、非会員の参加希望者は事務局に連絡していただき、事務局から登録の URL を知らせることになっていますので、この URL を直接非会員に知らせることはおやめください。

<プログラム>

第一報告【研究発表】

他科から勤務異動した看護師が精神科看護に熟達する経験プロセス

前田 和子 （筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科学専攻）

第二報告【研究発表】

神経性難病者の病の受け入れに関する研究—脊髄小脳変性症を中心として—

朝田 圭 （桜美林大学大学院人間科学専攻健康心理学専修）

第三報告【研究発表】

うつ病による長期休職者が職場に復帰する心理プロセス及びそれに影響を与える支援要因

隅谷理子（上智大学大学院人間科学研究科）

第四報告【構想発表】

薬物依存症からの回復を目指す人の社会生活を支援するソーシャルワーク過程

山口みほ（日本福祉大学社会福祉学部保健福祉学科）

◇編集後記

・春節（中国の旧正月）を迎え、皆様いかがお過ごしでしょうか。お仕事・研究とも、ますますご発展のことと拝察申し上げます。子供のころ、「四十肩・五十腰」（でしたか？）と良く耳にしたことを覚えています。四十代も後半、肩の痛む今日この頃です…皆さんは、「あずきのカイロ」はご存知でしょうか？袋に小豆が入っているだけで、電子レンジで加熱しておなかや肩にあてるのですが、ほんのりお汁粉の香りがして、心も体も暖まりますよ。（竹下）

・竹下さんは春節の話題をされていますが、実は今日はひな祭り。竹下さんから編集したドラフトが送られてきたのに、諸々の事情により（？）私の手元で半月以上温められていたのです。みなさま、お届けするのが遅くなって、すみません。で、今月のニューズレターのコンテンツは、みなさんからの近況報告です。現在、会員は250名を超え、現在も増加中です。初心者の方も多いのですが、こうした近況報告は、どんなきっかけでテーマに出会い、この研究法を採用したか、どんなところに難しさを感じているか、その後、どんなふうに研究を展開していったか、等など具体的に参考になることが多いのではないのでしょうか。また新しく入られた会員の方にも近況報告をお願いしています。ご自分の自己紹介を含め、どんな研究をしているか（しようとしているか）をご報告いただくことで、助言をもらえることもあるかもしれませんよ。人的にも、もっと交流が広がっていったらなと思っています。編集委員よりお願いがいきましたら、ぜひよろしく願います。

さて、お知らせのように今月は研究会が開催されます。参加には参加登録が必要ですので、お忘れなく願います。定員を超えた場合はお断りすることとなりますので、お早めに参加登録をお願いします。研究会のあとの懇親会も、研究の助言が得られる場ですので、どうぞご活用ください。（佐川）